
1ペインの悪夢

悠月

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

1ペインの悪夢

【著者名】

Z8033C

【作者名】 悠月

【あらすじ】

闇を蝕む満月の夜にはジンが現れる。「君の願いは何ですか?」

今宵の舞台は船の上、その問い合わせにこたえるのはー・・・

1ペインの悪夢

しんと静まつた船の中

少年は眠れずにデッキに佇んでいた

一年に一度だけ奉公先から家に帰ることが出来る日
嬉しさのあまり寝る事などできないのだ

潮風を受けながら水面を見下ろす

恐ろしい闇色の海も

満月の光りを反射して光沢を帯びる

あまりに大きな月が落ちてきやしないかしら

そんな心配など知らぬげに月はやわりと闇を侵蝕している

肌寒さも手元の暖かいお茶のため気にならない

赤いお茶も月光を跳ね返して光る

胸元を飾る水晶のペンダントもきらりと光った

少年は何だか幸せだつた

明日には両親にも妹にも会えるのだ

奉公先のおやじさんがたまにくれた小遣いも使わずに貯めた

故郷のハーナおばさんの店で妹の大好きなお菓子を買ってやろう
それとも可愛いリボンを買ってやろうか

でも欲を言えば

あと余分に1ペインあればいいと思つ

そうすれば妹に星のように美しいキャンドゥーをお土産にできるのに
港のショッピングで見つけたキャンドゥー

初めて見たとき本当に食べれるのかしらと疑問に思ったものだ

カップの中で砕けた月の光はペンダントの中を巡った

「君の願いは何ですか？」

少年は突如聞こえた声に驚き後ろを振り返った
そこには全身を黒衣で纏めたものが立っていた

少年は目を丸くする

少年が甲板に出た時には確かに他の人間が甲板にいたが
今日の前に居るものとは明らかに違う

視線を巡らすと

もう一人の人間がいた

少年より先に甲板にいた者だ

艶かしい女だつた

そちらも驚いたように黒衣のものを見つめている

「・・・あの」

「私は月夜に呼び出される魔物ですよ」

おろおろと視線をさ迷わす少年にそれはフフッと笑った

「まもの・・・」

「ええ願いを叶えるためのね。」

それに呼び出されたのだと魔物は少年のペンダントを指差した

満月に導かれて現れる魔物をジンと呼んだだろつか
そんな話をずっと昔に聞いた気がする

ああ、そうだ

まだ家にいた頃に寝物語として聞いたのだ

『とても大きな満月の夜にはねジンが現れるんだよ
彼はとっても気まぐれで
時に願い事を叶えてくれる』

「さあ、願い事はなんですか？」

願い事？

自分の願い事は・・・

ああ、そうだ

あと1ペインあつたら

少年が考え込んでいたら向こうから女が近づいてきた
少年には目もくれず、魔物を凝視している

「なんでも叶えてくれるのかい？」

女は甘やかな声で尋ねた

「願い事によりますが」

「不老不死なんかもかい？」

「場合によりますね」

魔物は質問に答えながらも女のまつをチラシとも見ない
あくまで契約者は少年なのだ

「まつや。願い事はなんなの？」

女は鼻を鳴らしながら言った

「・・・ペイン」

少年の声は小さかったが、『』は寝静まつた船の上

「1ペインですか・・・？」

「1ペインー」

女は叫んだ

1ペインなど彼女の一回の食事代にも遠く及ばない
彼女の形の良い爪一枚とでもひと金がかかっている

「まつや。私が1ペリオンあげるから、私の願い事を叶えさせてお
くれよ。」

1ペリオンは100ペインである

それだけあつたら小さな店の菓子など全部買つてお釣りがくる

「1・・・ペリオン?」

少年には縁もない金額だった
すごい額であることは分かるがいまいち現実味がない

「でも・・・1ペイン」

そう

少年のほしいのは1ペインなのだ
星のキャンディーを買ったための

「1ペインなら文句無いんだね」

女は少年に1ペインコインを投げつけた
銀色の光りは少年の手に滑り落ちた

「ほら、これで私は願い事を買ったんだ。いいだろ?」

少年は「ぐつ」と頷いた。

「ありがとう」

少年は律儀にお辞儀をして礼を言つたがもはや女の目には映つてい
なかつた

女はぬらりと光る唇を笑みの形に歪めた

「ああ、私の願いを叶えておくれ」

「・・・いいでしょ?」

魔物はため息をついたようだった

「あなたの願い事は何ですか。」

「見て」

女は自分に手を当てた

「象牙のような肌。金糸の髪。エメラルド色の瞳。珊瑚のような頬。
ねえ、美しいでしょ？」

女が言い張るとおり、女は美しかった
肌には傷一つ無く、髪は月の光すら眩むほど
深い色の瞳は誰をも惹きつける
均整の取れたからだのラインは名工による彫刻のようだ

「努力の賜物よ。」

「これが失われるなんて御免だわ。私ずっと美しい今までいたいの。」

女は魔物を真正面からとらえる

「さあ、叶えて頂戴」

「ずっと美しいままで・・・？」

「やつよ」

象牙の肌、金糸の髪、エメラルドの瞳、珊瑚の唇、真珠の歯、桜
貝の爪・・・

「ええ、良いですよ」

魔物は嗤つた

どんな絵画の魔物よりも禍々しく
どんな名工の彫刻よりも美しく

「美しい今までね」

潮風が魔物の衣を翻す

深海よりなお深い闇が眼前を埋め尽くす

もつと美しくなりたい?

それは暗く甘美に漫透する闇の言葉

「もぢろん」

無知な人間は耳を塞ぐ事を知らない

いいでしょう

象牙の肌、金糸の髪、エメラルドの瞳、珊瑚の唇、真珠の歯、桜
貝の爪・・・

いつの間にか魔物も言葉も消えてしまった
月光に照らされるのは女だけ

「ああ

そこにあつたのは言葉通りの体だった

「もう誰にも負けないわ」

女は笑つた

そう、ずっと・・・

「そうよ。永遠に！」

永遠にね・・・

その時

波がうねつた

夜の扉が開き

闇色の触手が女を捕らえる

氷のようすに冷たいソレは女をお冷たい海底に攫つていく

「

音にならない叫びが泡となつて溶けていく

象牙の肌、金糸の髪、エメラルドの瞳、珊瑚の唇、真珠の歯、桜
貝の爪・・・

貴石で造られた体が浮かび上がることはない

よかつたでしょう？

これであなたに傷を付けるものはございませんよ

永遠にね

まあその美しさを賞賛するものもいませんがね

『願い事は何かと聞かれたら

一つしか言つてはいけないよ

一つ田の代償は1ペイン

もう一つ田の代償は魔物の口付けだから

一つ田を聞かれても

耳を塞がなくてはいけないよ

つかり聞いてしまえば

気がついたときには海の底なのだから

(後書き)

読んでいただきありがとうございました。この作品『彼方より響く
唄』と同シリーズになっています。よろしかつたらそつちも読んで
みてください。ご意見、ご感想をいただけると幸いです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8033c/>

1ペインの悪夢

2010年10月17日04時36分発行